



『台湾生まれ日本語育ち』(温又柔)

吉田 梨紗



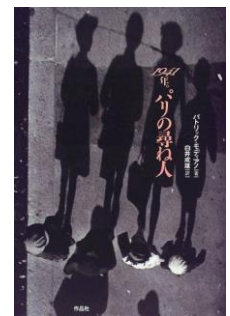
台湾人の両親の仕事の関係で小さい頃から日本に住んでいる著者は、自分のアイデンティティーを考える際に、台湾なのか日本なのかわかりません。日本に住んでいる方が長く日本語が堪能、しかし台湾人なのに台湾語が話せないことや台湾についてよく知らないことを恥じ、葛藤します。

祖母は日本語が話せますが、それは過去の歴史で強制的に日本語を話すように教育されたから、ママが話す「ママ語」(台湾語・日本語・中国語を混ぜたもの)も外国で生きていく母の苦勞から生まれたのだと感じ取ります。そうして著者は日本語を話す日本に住む台湾人それが自分のアイデンティティーだと受け入れるのです。著者の本で『魯肉飯のさえずり』には日本の文化の中で生きていく台湾人の苦悩と葛藤、著者の実体験が物語に反映されています。併せて読むとより理解が深まると思います。(白水社)

『1941年。パリの尋ね人』(パトリック・モディアノ)

原 真由美

著者はある日、昔の新聞(1941.12.31付)に掲載された「尋ね人」の広告を目にしたことから、10年の歳月をかけて一人の少女の足跡を追います。ドラ・ブリューデル、15歳、瞳はマロングレー、うりざね顔、ユダヤ人。寄宿舎から脱走し行方がわからないというものです。少女が暮らしたパリの街を歩き続け徐々に判明される点と点が結びあると、ナチス・ドイツ占領下時代に抵抗しながら生きたドラの姿が徐々に浮かび上がってきます。けれどアウシュヴィッツ収容所行きの列車に父親と送られたという結末に、もはや生存の望みがないことを知り読者も絶望します。この世に生きた痕跡を残らず消された何百万人もの人の為に想像力を駆使し一人の少女の生きた証を甦らせた物語です。



(作品社)

『パリのキッチンで四角いバゲットを焼きながら』(中島たい子)

大久保美玲



フランス人女性を叔母にもつ著者は子どもの頃からフランスに関わりが深く、それゆえ「日本人は、フランス人を過剰評価していない？」と少し斜めからフランスを見ていました。しかし年を重ね、叔母の生き方に少しずつ親しみを持てるようになったため、改めてフランスにまとまった時間滞在して、叔母と向き合うことにします。叔母は無理せず心地よい暮らしを営んでいます。自家製のバゲットも手をかけず5分くらいこねて焼くだけ。外泊する時は寝袋と称したシーツを人数分持って行き、自分もベッドも汚さないですむようにします。古い物は歴史ごと自分の物になるため非常にお得！と喜んで買い求めます。そんな自然に近い形で無理せず生きる知恵はところどころ拝借できそう。ちなみにフランス人は10着しか服を持っていないというのは少し違うらしいです。(ポプラ社)